歯科用手術用実体顕微鏡の活用によって日常臨床が変わった!!
～高精度な低侵襲アプローチ～

長尾歯科・茨城県ひたちなか市
長尾 大輔

医科において，内科とは「手術的処置によらず，薬物療法や食事療法等で治療しうる各種器官の疾病の診断・治療を行う臨床医学の分野」，外科とは「物理的な処置や手術等により疾病や障害を治療する臨床医学の分野」と位置づけられている．

手術用実体顕微鏡は，1950年代に耳鼻咽喉科，1960年代に眼科・脳神経外科等，主に外科的な分野で古くから臨床応用され，その歴史とともに，術式はより低侵襲で高精度なものへと進化し，多くの成果を残しているのは言うまでもない．これに対し歯科では，1990年代に入りようやく歯内療法で用いられるようになったが，医科に比べ，歴史・臨床応用範囲とも浅いのが現実である．我々歯科は，口腔外科に限らず，いずれの分野においても外科的に原因の除去を施すことが多いため，手術用実体顕微鏡の臨床応用は，本来最適であると考える．そのため私は勤務医時代を含め現在まで12年に渡り，歯科用手術用実体顕微鏡を日々活用してきた．

本シンポジウムでは，歯科用手術用実体顕微鏡を駆使し，高精度な低侵襲アプローチを施した中等度以上の歯周病や，その他私が遭遇した様々な症例を供覧する．